令和五年度新宿区夏目漱石コンクール　わたしの漱石、わたしの一行

中学生の部　最優秀賞

「坊っちゃんの江戸っ子口調と文芸の伝統による裏打ち」

筑波大学附属中学校　一年　河面　玲

作　品　名『坊っちゃん』
選んだ一行　ハイカラ野郎の、ペテン師の、猫っかぶりの、香具師の、モモンガーの、岡っ引きの、わんわん鳴けば犬も同然なやつとでも言うがいい

『坊っちゃん』は、全ての場面が面白い。まず冒頭に、あとさき考えない坊っちゃんのいたずらの事例が示され、彼の性格が手に取るようにわかる。そして漱石の名文で、つい笑ってしまう箇所がいくつもある。

そんな『坊っちゃん』の中でも一番気に入ったのは次の一行だ。

「ハイカラ野郎の、ペテン師の、イカサマ師の、猫っかぶりの、香具師の、モモンガーの、岡っ引きの、わんわん鳴けば犬も同然なやつとでも言うがいい」

これはうらなり君の送別会で坊っちゃんと山嵐が赤シャツの悪口を言っている場面だ。悪口といっても罵倒というよりどこかユーモラスであるところがまたよい。

読んだ瞬間目が引かれ、つい読み返してしまった。文学作品で悪口を並べたてるものは読んだことがなかったから。そして頭の中で声に出して読んでみると実に響きがいい。さらにリズムも完璧だ。また、自分の演説はあまりよろしくないと言う坊っちゃんの口からこんな言葉がスラスラと出てくることも、深く印象に残った。早口でまくし立てることができる坊っちゃんなら、演説も得意のはずだと思うのだけれど。

『坊っちゃん』は一九〇六年に書かれ『ホトトギス』に掲載された。当時の江戸言葉は、今耳にする「標準語」よりもっと「江戸弁」に近かったのかもしれない。江戸言葉は、言葉をリズムよく並べて、たたみかけるようにしゃべるのが一つの特徴だ。

ただ、この手法は江戸言葉だけでなく、古くから日本の文芸で使われ、磨かれてきたものだ。落語の寿限無、歌舞伎の外郎売や弁天小僧菊之助の口上などは、そのほんの一例である。時代はまだまださかのぼれる。阿刀田高は『ことば遊びの楽しみ』の中で、万葉集にある畳文の例として天武天皇の歌を紹介している。「よき人のよしとよく見てよしと言ひし吉野よく見よよき人よく見」。そして文芸の世界だけでなく、私たちの日常にも言葉をユーモアとともにリズムに乗せて並べる手法は根付いている。「けっこう毛だらけ猫灰だらけ」などの地口もその一つだ。あるいは映画フーテンの寅さんがやるテキヤの口上も代表例の一つだ。畳みかける口ぶりが心地よい。さらに日本最古の書、古事記にも言葉あそびが使われているというネット上の記事まで見つけたが、具体例が見当たらないので今後の調査課題としたい。

こうして見ると、私の目をひいた一文は、ただ赤シャツを罵る言葉ではなく、また単なる威勢のいい江戸言葉でもなく、日本の文芸や長い伝統の中で培われ、さらには日常にまで浸透してきた技法による言葉であることがわかった。

なぜ私の目がこれほど釘付けにされたのか、知れば知るほど興味深くなっていく。言葉の歴史というものを、私はこれからもっと知っていきたい。